



今日から始める
自然観察

この草で染めたら 何色になる？



いがりけいこ
猪狩啓子
高崎市染料植物園

日本では昔から、植物の枝や葉、樹皮、根を煮出して、糸や布を染め、色を楽しむとともに、抗菌や防虫効果を活用してきました。植物の色と伝統文化を観察に取り入れてみてはいかがでしょうか。



湯
上
げ

お風呂上りの赤ちゃんをくるむのに使った江戸～明治時代の布。長寿を願う鶴亀の吉祥（きつしょう）文様が藍染され、上部片辺の三角の部分は退色しているがベニバナで染められている。アイ・ベニバナともにあせもなどによいとされ、さらにベニバナには皮膚病や眼病に効果があると信じられていたため、この部分で赤ちゃんの顔や眼の周りを拭いた。アイ・ベニバナともに飛鳥・奈良時代に中国から栽培用として渡来。



例：アイ
(タデ科)



例：ベニバナ (キク科)

紅花絞り染 麻の葉文着物

ベニバナで染められた江戸時代の着物。赤は昔から魔を除ける色とされ、天然痘や麻疹が流行すると子どもに赤い着物を着せた。ベニバナは、血のめぐりを良くし体を温める効果があるといわれている。



例：ウコン (ショウガ科)



うこん木綿

殺菌防虫の効果があるとされ、この布に包んで、書・絵画・陶器・漆器・衣服を保護し保管するために使われた。ウコンは染めには平安中期ごろから利用がはじまったといわれる。

植物に秘められた色

色の名前の中には、植物の名前がそのまま色名になっているものがあります。例えば「桜色」といったら、何が思い浮かぶでしょう。すぐに花の色が浮かびませんか。では、「茜色」は？ 夕焼けのような赤い色、オレンジがかった赤い色。でもアカネには、茎や葉のどこにも赤みがかつたところはありません。どこにその色が隠れているかというと、根なのです。名前の由来も赤い根からきているといわれています。この根で染めた色が茜色です。ほかに、「紫色」「支子色」「黄蘗色」など。どの植物も、思い浮かぶ色は、植物の外見からは見つけられません。紫色は、ムラサキの根、支子色はクチナシの実、黄蘗色はキハダの内樹皮、というんな所に色を秘めているのです。

今、私たちは、カラフルな衣服で着飾っていますが、その色はほぼ化学染料で染められたものです。でも、明治時代に入るまでは、衣服を染めてきたのは植物です。鮮やかであつたらう平安時代の十二単衣も、草や木から染めた色でした。染めるのも布だけでなく、紙も染めました。そして色を楽しむ

染色に使われる身近な植物

※色を発色・定着させるための工程を媒染（ばいせん）という。写真横上段は媒染剤としてアルミを使った絹布、下段は鉄を使った絹布。クサギは無媒染。

コブナグサ（イネ科）



田のあぜや野原に多い1年草。古代から染色に使われ、9～10月の花穂が出はじめたころ刈り取った茎葉で、黄色やカーキ色が染められる。乾燥させて保存したものも使えるので便利。

クサギ（シソ科）



各地にある落葉小高木。葉や枝に悪臭があり和名は「臭木」。かわいそうないわれ方だが、青系の色を染める数少ない植物だ。古くから、紺色に熟した実を使い、水色から青色を染める。

フジ（マメ科）



山野に自生するが、古くから庭などによく植えられたつる性の落葉樹。つるや葉を使い、薄茶、金茶色、海松色（みるいろ）を染める。

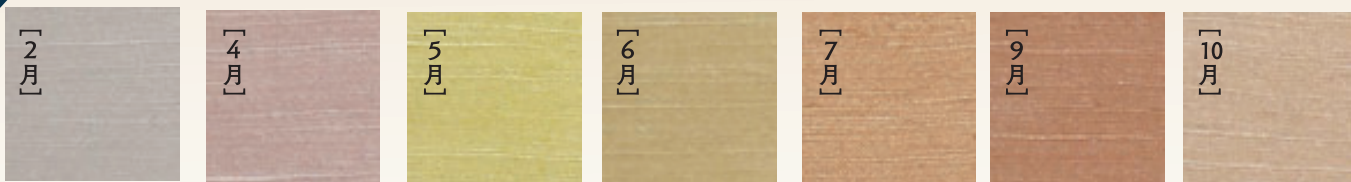
ビワ（バラ科）



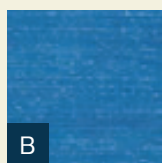
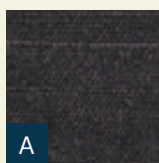
果樹として植えられる常緑小高木。初夏になる実も美味だが、12月から1月に咲く白い花からよい香りがする。樹皮、枝葉を利用して、赤茶系の色を染める。

同じフジの木の枝葉（落葉後は枝やつるのみ）で染色しても、季節により色が違う。

フジは色の違いが分かりやすいが、あまり色の違いが出ない植物も多い。



ヌルデ（ウルシ科）で染めるときは、アブラムシが寄生してできる虫こぶを使います。この虫こぶで染めた布はどっち？



答えは35ページ

自分で染めるのは、思いのほか簡単です。身近な植物を使って、庭で剪定した枝葉や、公園で剪定した枝葉をいただいたりして、危険な薬品も使わないので台所でもできちゃいます。ぜひ自分で染めて、身に付け楽しんでください。もっと植物と仲良くなれますよ。

自分で染めるのは、思いのほか簡単です。身近な植物を使って、庭で剪定した枝葉や、公園で剪定した枝葉をいただいたりして、危険な薬品も使わないので台所でもできちゃいます。ぜひ自分で染めて、身に付け楽しんでください。もっと植物と仲良くなれますよ。

けでなく染めることで浸透する薬効を活かしていました。紙に書かれた貴重な資料を長く残すために、生まれた赤子を無事に育てるために、大切な着物を虫から守るためにと。